

平成30年度二松學舎大学主催

全国学生・生徒

文芸コンクール

入賞作品集



はじめに

学長 菅 原 淳 子

平成三〇年度二松學舎大学主催全国学生・生徒文芸コンクールには多数の御応募をいただきました。誠にありがとうございます。

「漢詩部門」、「書道部門」、「書評部門」の各部門、ならびに両附属高等学校・中学校の学内感想文部門において最優秀賞、優秀賞、佳作、入選に選ばれた皆さん、おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

明治一〇年に開かれた漢学塾「二松學舎」を前身とする二松學舎大学は、昨年一〇月一〇日に創立一四〇周年を迎えました。これを機に、平成一八年以来一一年間続いて参りました漢詩コンクールは、昨年度より新たに設けた「書道部門」、「文芸書・書評部門」と共に文芸コンクールの一部門「作詩部門」（今年度より「漢詩部門」として再出発することになりました）

漢学塾として始まった二松學舎大学は、大変古い歴史と伝統を持つ大学です。漢学塾時代には若いころの夏目漱石や、後に現代書道の父と仰がれた比田井天来も学んでいます。漢学塾は昭和三年に国語・漢文の教員を養成する専門学校となり、戦後の昭和二四年に新制大学となりました。現在に至るまで日本全国の中学校、高等学校に国語や書道の教員を送り出して来たのみならず、国文学・

中国文学の研究者、書家や作家も数多く輩出して参りました。また昨年四月には創立一四〇周年を記念して、文学部に日本文化の新しい魅力を発信していくことを目的とした都市文化デザイン学科を新設いたしました。こうした状況の中で、本学文学部の持つ特色をいっそう強く打ち出した文芸コンクールを昨年度新たに発足させた次第です。

漢詩の創作である「漢詩部門」には、約一二〇作品をお寄せいただきました。詩題は自由のとでしたが、皆さんが創作された七言絶句には若い感性が凝縮されており、どれも素晴らしい作品でした。また「書道部門」は、中学生、高校生、大学生の部に加え、今年度から新たに小学生の部を設けて実施し、全部門通して、約二七〇〇作品をお寄せいただきました。端正な書から躍動的な書まで、書の魅力が見る人に伝わってくる作品ばかりでした。そして「書評部門」では、一般的な書評ではなく、新刊POP（広告）という新たな形式の表現を課題といたしました。数は少なかったものの、大変独創的な作品が集まりました。

これら三部門に加えて、両附属高等学校・中学校を対象とした学内感想文部門も実施いたしました。課題図書は、昨年生誕一五〇周年を迎えた、本学にも縁のある夏目漱石の『こころ』。読書感想文は、高校生の多様な視点から書かれ、大変新鮮に思われました。

ここに今年度の入賞作品集をお届けいたします。これからより多くの方に中国の歴史や文化、そして日本文化や文学を学んでいただくきっかけになれば幸いです。

最後に、平成三〇年度二松學舎大学主催全国学生・生徒文芸コンクールにご協力いただきました皆様に深く感謝申し上げます。

目次

はじめに	1
募集概要	5
漢詩部門 学生（大学生）の部	
最優秀賞	8
優秀賞	9
佳作	10
入選	11
漢詩部門 生徒（高校生・中学生）の部	
最優秀賞	13
優秀賞	13
佳作	14
入選	15
書道部門 学生（大学生）の部	
最優秀賞	17
優秀賞	18
佳作	19
入選	20
書道部門 生徒（高校生）の部	
最優秀賞	22
優秀賞	23

入選	佳作	優秀賞	最優秀賞	学内感想文部門	入選	佳作	優秀賞	最優秀賞	書評部門	入選	佳作	優秀賞	最優秀賞	書道部門 生徒(小学生)の部	入選	佳作	優秀賞	最優秀賞	書道部門 生徒(中学生)の部	入選	佳作
49	46	44	42		40	39	38	37		35	34	33	32		30	29	28	27		25	24

二松學舎大学主催 全国学生・生徒 文芸コンクール募集概要

募集内容

○応募資格

大学生、高校生、中学生、小学生

○募集部門

漢詩部門

・七言絶句 ※投稿は、一人三首まで

・自由課題

(一) 学生(大学生)の部

(二) 生徒(高校生・中学生)の部

書道部門

・用紙サイズ「半紙」

(一) 学生(大学生)の部

自由課題。

(二) 生徒(高校生)の部

古典臨書(漢字・仮名)の中から自由課題

(三) 生徒(中学生)の部

指定課題「理想の実現」または自由課題

(四) 生徒(小学生)の部

指定課題「まつ」(一年生)、「ねこ」(二年生)、「廣大」(三年生)、

「世界」(四年生)、「書道」(五年生)、「伝統文化」(六年生) または自由課題

書評部門

・平成二十九年一月一日以降に出版された文芸書(小説・詩歌・エッセイ等)の新刊POP(広告)、A5サイズ。

○賞・賞品

最優秀賞 各部門一点 賞状、盾及び賞品（書道部門は作品の表装）

優秀賞 各部門二点 賞状、盾及び賞品（書道部門は作品の表装）

佳作 各部門三点 賞状、及び賞品

○主催

二松學舎大学

○後援

文部科学省

毎日新聞社

日本経済新聞社

（一社）漢字文化振興協会

全国漢文教育学会

全国高等学校国語教育研究連合会

全日本漢詩連盟

（公社）全日本書道教育協会

二松學舎松苓会

○協賛

アサヒ飲料株式会社

株式会社 大塚商会

株式会社 三省堂書店

ステッドラー日本株式会社

漢詩部門

学生

(大学生)

の部

最優秀賞

二松學舎大学 一年 濱田耕平

山居

山居

山居香桂素琴聲

山居香桂素琴の聲

秋色寥寥懷友生

秋色寥寥として友生を懷ふ

信絶十年身作客

信絶えて十年身客と作り

中宵酌酒向君傾

中屑酒を酌んで君に向つて傾く

講評

桂花の咲き匂う山の住居に、琴の音が聞こえてくる。秋深まるわびしさの中、懐かしい友を思う。便りも絶えて十年、旅の身空、夜も更けて独り酒を酌み、君を思いながら過ごしている。

前半は、琴の清らかな音色と、桂花のよい香りが、秋のわびしさに品のよい彩りを添え、後半の親友への思慕の情をそそっている。品のよい、味わい深い作。

優秀賞

二松學舎大学 三年 木村 茉友美

消夏會友

消夏會友

六月村郊蟬語長

六月村郊蟬語長く

炎威日午汗如漿

炎威の日午汗漿の如し

北窗搖扇微風起

北窓扇を揺らせば微風起る

迎友披襟傾一觴

友を迎へて襟を披き一觴を傾く

優秀賞

安田女子大学 二年 久行 加恵

客中作

客中作

野菊驕霜十月時

野菊霜に驕る十月の時

花英芬苾正離披

花英芬苾として正に離披

他鄉憶國江邊夕

他郷国を憶ふ江辺の夕

村女先趨小狗隨

村女先に趨りて小狗随ふ

講評

前半は、蟬の声、照りつける暑さ、と夏の気分を増幅し、後半は、北窓、微風、と涼し味を添えて、最後に「友と一杯」と洒落こんだ。消夏の詩の上乗の一作。

講評

野菊の花が、霜に負けずに咲き誇る情景を前半に描き、それをバックに、故郷の村の娘の小犬とじゃれている懐かしい思い出をあしらったのがうまい。故郷懐しの気分が横溢。

佳作

岐阜女子大学 四年 末國 悠

秋夜偶成

秋夜偶成

秋夜孤窗清月光
西風蕭索引悠長
執翰磨硯遊他國
千里懷君淚幾行

秋夜孤窓月光清く
西風蕭索として愁ひを引きて長し
翰を執り硯を磨して他國に遊ぶ
千里君を懷ひて涙幾行

佳作

安田女子大学 二年 和田 愛

客中作

客中作

千里雁行之字分
悲聲斷續不堪聞
登臺故國知何處
遊子遠看唯有雲

千里雁行之の字に分かる
悲声断続 聞くに堪へず
台に登れば故国知んぬ何れの処ぞ
遊子遠く看れば唯だ雲有るのみ

【入選】

「山寺」

安田女子大学

四年

川村夏美

「客中七夕」

安田女子大学

三年

木村彩乃

「九日」

安田女子大学

四年

小島朱音

漢詩部門

生徒

（高校生・中学生）

の部

最優秀賞 該当作品なし

優秀賞

仁愛女子高等学校 二年 伊藤 里紗

寒 菊

寒 菊

九月連山帶瘦容

九月連山瘦容を帯び

空林葉盡印霜濃

空林葉尽き印霜濃し

可憐叢菊東籬下

憐れむべし叢菊東籬の下

佳色耐寒花影重

佳色寒に耐え花影重なる

優秀賞

栃木県立小山西高等学校 三年 河野辺 里桜

秋日偶成

秋日偶成

冷氣侵肌易感秋

冷氣肌を侵し秋を感じ易く

秋風天地月光流

秋風に天地月光流る

野花爽氣懷君切

野花爽氣君を懷ふこと切なり

唧唧蟲聲窗外幽

唧々たる虫声窓外幽かなり

講 評

霜が降りて寒くなった風景を、起句で山の様子を「瘦容」で、承句で誰も居ない林では葉が落ちたとした。次の転・結句で東の籬の菊が寒さを忍んで、幾つも花を咲かせている姿を愛でる作者の気持を表現した。

講 評

起句で空気が冷ややかになり秋になったことを実感し易くなった。承句ではそのような天地を月が照らしているが、爽やかな野で咲いている花を見て君のことが思い出されるとした転句は繋がりが悪い。又、題を直した。

佳作

立川市立立川第九中学校 二年

新井 結

夏日偶成

炎威滿地絕涼風
流汗淋漓草屋中
迎夕庭前蟲語盛
東天遙望月玲瓏

夏日偶成

炎威地に滿ち涼風絶え
流汗淋漓草屋の中
夕を迎え庭前虫語盛んなり
東天遥かに望む月玲瓏

佳作

京華中学校 一年 伊丹瑠亮

秋夜偶題

銀河如水夜悠悠
風竹迎來月一鉤
濃淡青山殘雨後
森然天地入新秋

秋夜偶題

銀河水の如く夜悠悠
風竹迎え來たる月一鉤
濃淡の青山残雨の後
森然たる天地新秋に入る

佳作

仁愛女子高等学校 二年 佐藤有華

初冬訪山寺

北郊風老入初冬
石甃霜鋪冷碧松
山寺深閑楓落盡
狂花一點促吟胸

初冬山寺を訪ふ

北郊風老い初冬に入る
石甃霜は鋪き碧松冷ややかなり
山寺深閑楓落ち尽くす
狂花一点吟胸を促す

【入選】

「梅天閑詠」

仁愛女子高等学校

二年

櫟原里奈

「夏日偶成」

立川市立立川第九中学校

二年

小林千紘

「晩夏読書」

栃木県立小山西高等学校

三年

篠木優那

「苦熱」

仁愛女子高等学校

一年

竹内こゆき

「水村夏夜」

仁愛女子高等学校

一年

増田葉月

書道部門

学生

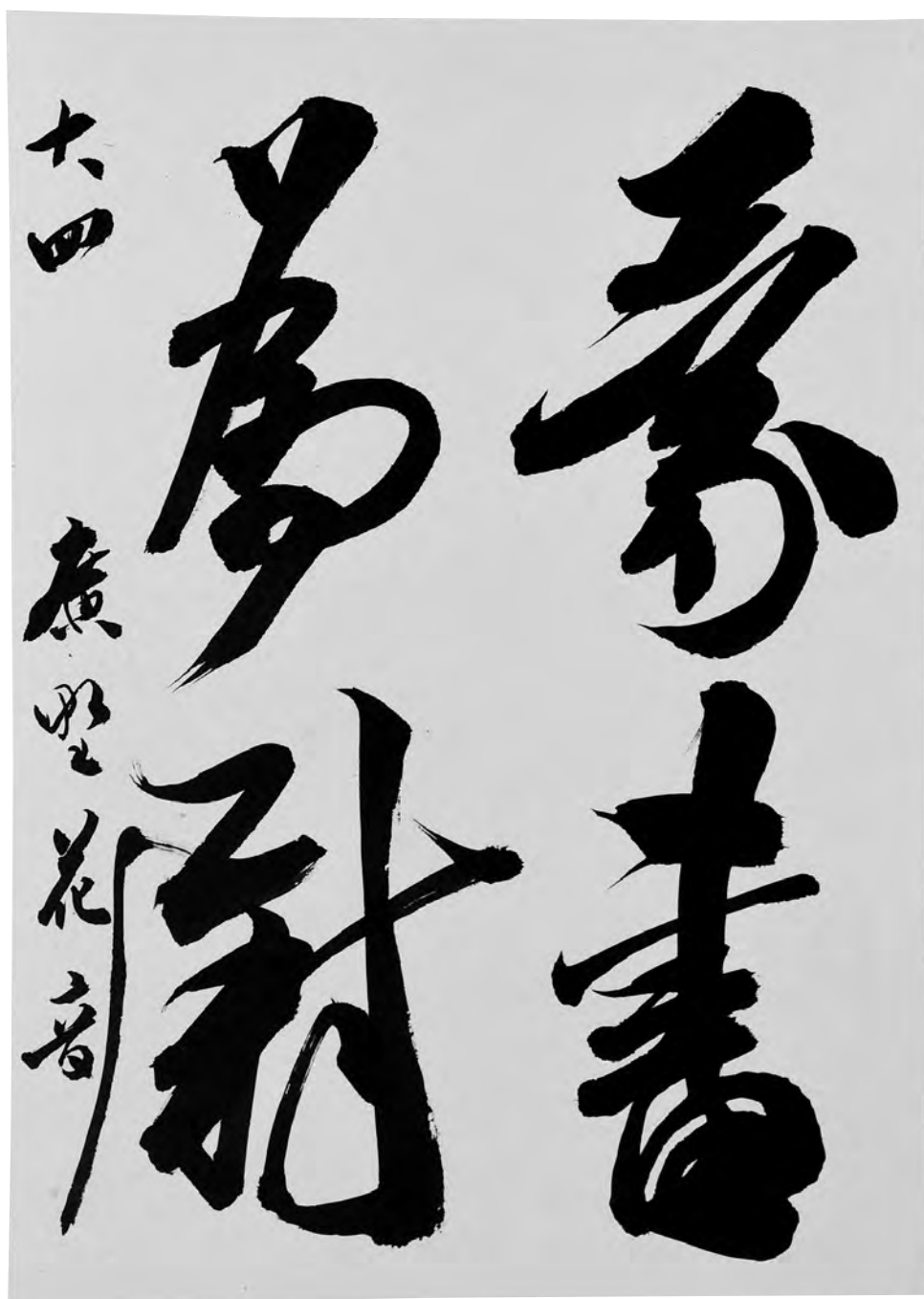
(大学生)

の部

最優秀賞

徳忱帖

二松學舎大学 四年 廣 野 花 音



講 評

宋の米芾の傑作とされる徳忱帖の臨書作である。中国における書の歴史上、最も書聖王羲之を崇拜し、最も王羲之の書を踏襲したのが米芾とされる。その意味において、この作品は王羲之の書法を充分に学び、筆意の端々に、存分に王羲之の風を發揮されていると思われる。殊に、米芾の洗練された書に対する考へが、強い筆意となって表現され秀作となった。

優秀賞

清雅奇逸

二松學舎大学 三年 伊藤 百映

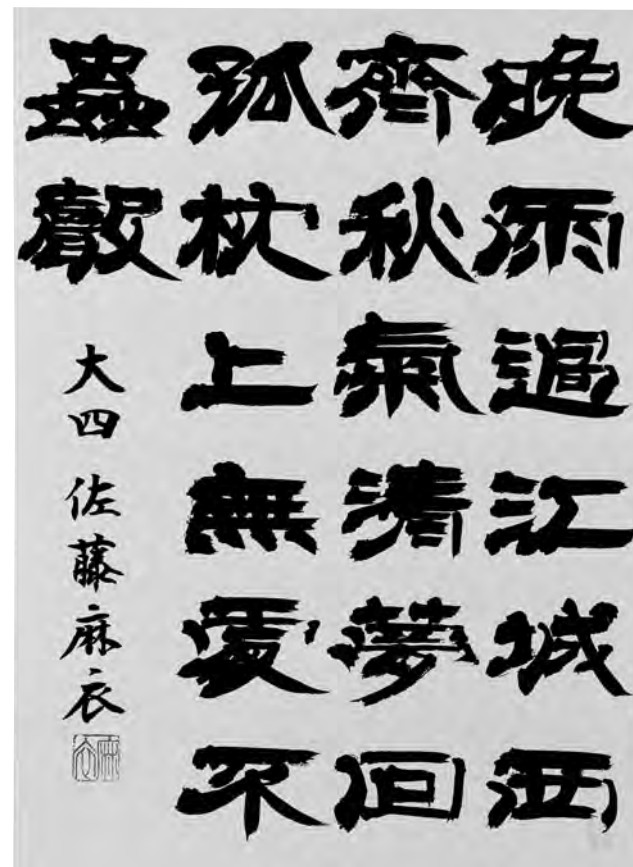


講評

清らかなイメージを想像させる「清雅」や、変化の妙に富んだ線が潇洒な雰囲気を出す面白味のある作品です。ただ変化を具えるだけでなく、一貫された気脈からは、洗練された筆意がうかがえます。

僧善住詩

安田女子大学 四年 佐藤 麻衣



講評

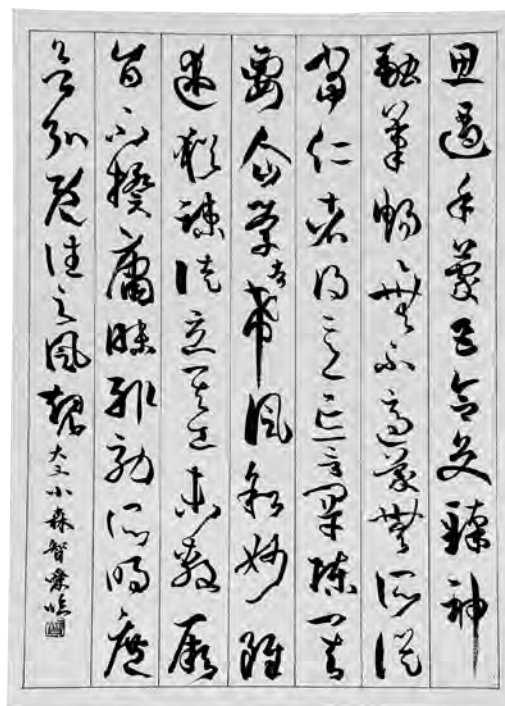
重厚な線、適量の墨量と字間をとった余白による黒白の対比が見事です。が、なにより半紙とは思わせない、大きく感じさせる紙面構成が魅力的です。三行目の「孤」や「無」字を大きく見せるよう工夫すれば、更に良くなります。

佳作



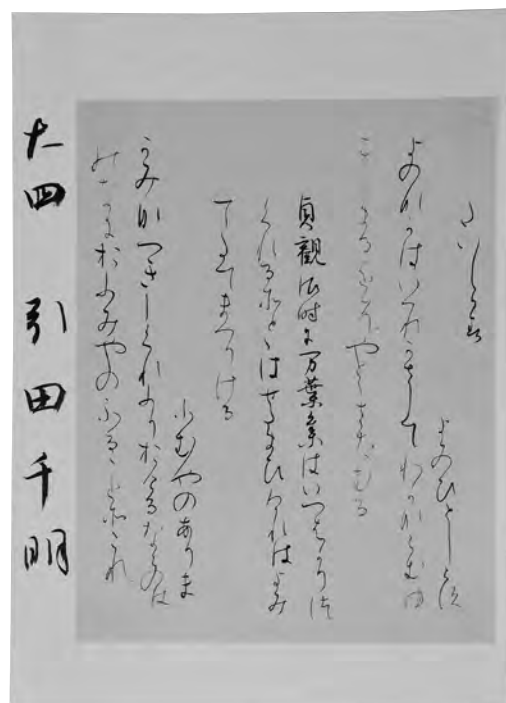
賢愚經卷第十五

二松學舎大学 三年
関 美 咲



臨 書譜

安田女子大学 三年
小 森 智 愛



臨 高野切第三種

二松學舎大学 四年
引 田 千 明

【入選】

「臨 傳山 七言絶句幅」

安田女子大学

二年 黒木 麻琴

「臨 蜀素帖」

二松學舎大学

二年 小林 真歩

「創作 龍飛空天駕馬」

二松學舎大学

四年 近藤 克昭

「関戸本古今集」

二松學舎大学

四年 佐藤 季美歌

「楷書創作 西北望長安」

二松學舎大学

三年 長谷川 真子

書道部門

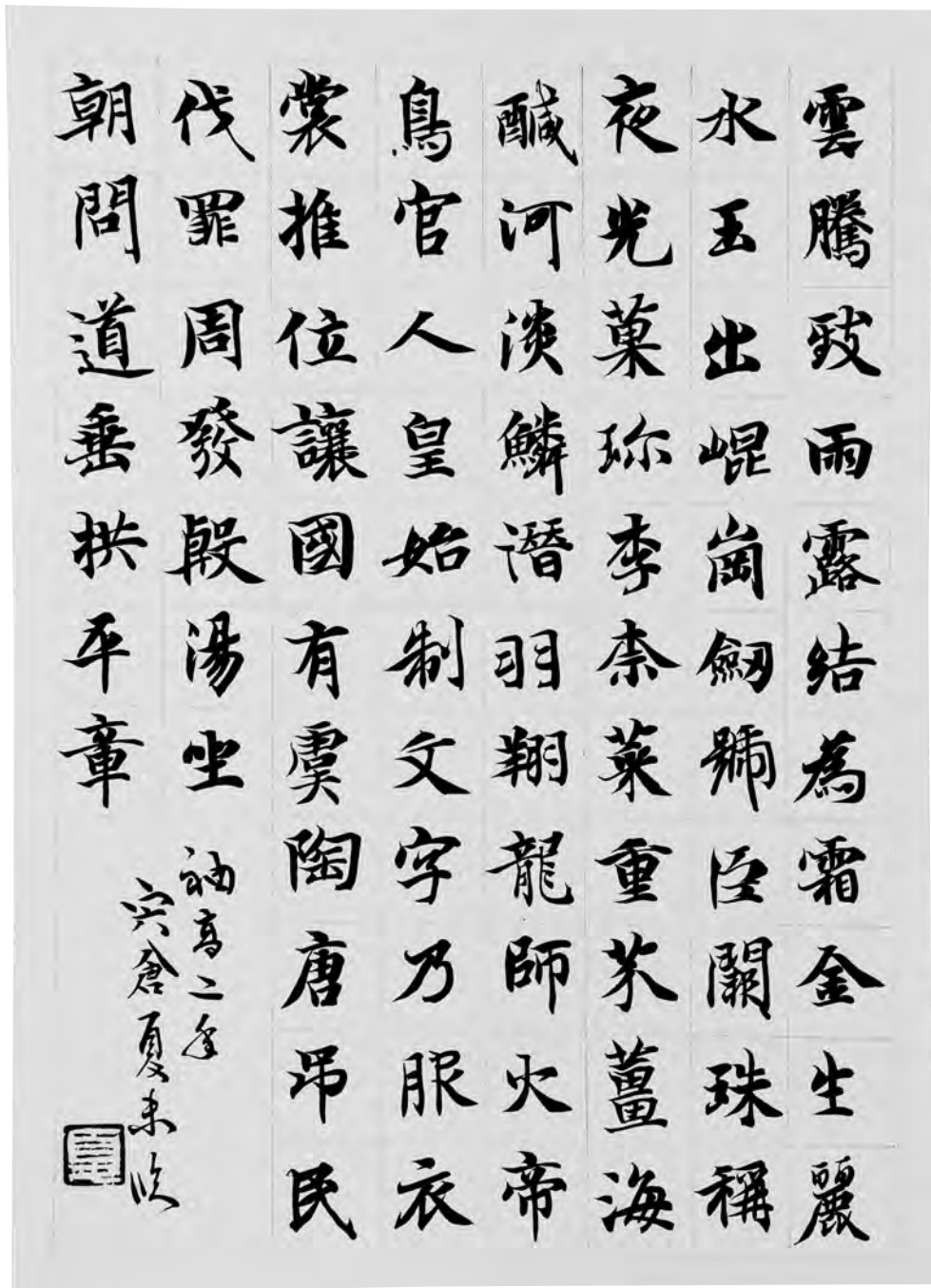
生徒

（高校生）

の部

最優秀賞

臨 智永真草千字文 千葉県立袖ヶ浦高等学校 二年 宍倉夏未



講評

智永の真草千字文の真（楷書）を原寸大で臨書した。形式として界格を細線で引き、マス目と文字とがバランス良く書かれている。書法の優れている点は、線質のおだやかな中に強さを秘めた点にある。殊に、ハネや左右の払いには細心の注意を払って、智永書の筆意を充分に捉えたものと言える。字形は原本を忠実に捉え、しかも伸びやかな抑揚を表現した秀作である。

優秀賞

臨 蘭亭序

神奈川県立有馬高等学校 二年 根本 碧



講 評

「朗」や「清」字の月部の点の打ち方に改善の余地を残しますが、高校生らしい素直な運筆、切れ味の鋭い線、そして蘭亭序の字形を忠実に捉えようとする姿勢を高く評価しました。落款の収め方も秀逸です。

臨 元顥僞墓誌銘

広島県立五日市高等学校 二年 藤本 笑 碧



講 評

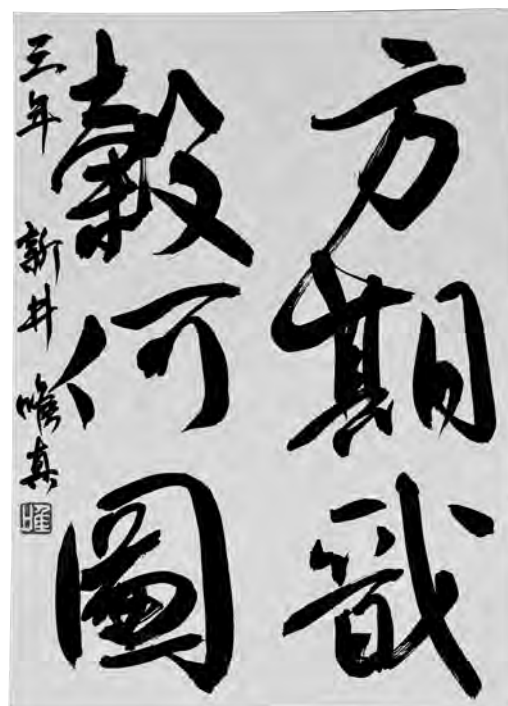
六朝の元顥僞墓誌の臨書である。筆意の捉え方が殊に優れ、六朝楷書の特徴を存分に発揮した。筆圧の強さはもとより、空間における余白から実線以外の興趣が伝わってくる作品と言えよう。

佳作



臨 始平公造像記

仙台育英学園高等学校 三年
三 浦 朱 莉



臨 祭姪文稿

千葉県立国府台高等学校 三年
新 井 唯 真



臨 張猛龍碑

福島県立田村高等学校 一年
山 代 琴 葉

【入選】

「千字文」	浦和明の星女子高等学校	三年	青野 さくら	「臨 顔真卿 祭姪文稿」	佼成学園女子中学高等学校	三年	田 島 風
「書譜」	長野県屋代南高等学校	二年	青山 円花	「自書告身」	千葉県立国府台高等学校	一年	畠 山 結
「臨 石山切伊勢集」	仙台育英学園高等学校	三年	荒 みさき	「臨 蘭亭序」	星野高等学校	二年	藤 倉 はるか
「臨 伊都内親王願文」	埼玉県立熊谷女子高等学校	二年	新 井 菜央	「臨 蜀素帖」	千葉県立袖ヶ浦高等学校	三年	藤 田 愛理
「牛轍造像記」	愛媛県立松山東高等学校	一年	飯 乃 愛	「張猛龍碑」	拓殖大学紅陵高等学校	二年	本 間 美帆
「礼器碑」	明秀学園日立高等学校	三年	稲 葉 諒	「臨 張瑞図 杜甫飲中八仙歌」			
「臨 薦季直表」	広島県立五日市高等学校	二年	井 上 悠乃		茨城県立牛久栄進高等学校	二年	増 田 若桜
「松風閣詩卷」	埼玉県立大宮光陵高等学校	三年	大久保 佳菜	「蘭亭序」	東京都立小松川高等学校	二年	村 上 優希
「臨 伊都内親王願文」	千葉県立袖ヶ浦高等学校	三年	大竹 恩 譜	「古典臨書 書譜」	浜松開誠館中学校・高等学校	一年	吉 田 悠花
「黃州寒食詩卷跋」	青森県立青森中央高等学校	三年	小 山 野 花				
「臨 顔氏家廟碑」	東京都立千早高等学校	三年	加 藤 帆 風				
「乙瑛碑」	千葉県立国府台高等学校	一年	金 本 奈 那				
「夫靈跡誕遺必」	大東文化大学第一高等学校	二年	金 子 楓 佳				
「鄭義下碑」	武蔵野大学附属千代田高等学院	一年	金 庭 未 来				
「比丘道匠造像記」	明秀学園日立高等学校	三年	木 田 みのり				
「風信帖」	東京女学館高等学校	一年	木 村 佳 鈴				
「度量如海涵春育 金冬心」	拓殖大学紅陵高等学校	三年	木 村 愛 琴				
「九成宮醴泉銘」	市川高等学校	二年	佐 藤 望 羽				
「臨 孫秋生劉起祖等造像記（縣功曹孫秋生）」	二松學舎大学附属柏高等学校	二年	三 野 紀 花				
「楊峴」	千葉県立市川南高等学校	三年	鈴 木 翔 也				
「古典臨書 自書告身」	浜松開誠館中学校・高等学校	一年	鈴 木 菜 未				
「張遷碑」	兵庫県立社高等学校	二年	高 瀬 彩 里				

書道部門

生徒

(中学生)

の部

最優秀賞

文化遺産

東松山市立南中学校 二年 大谷 渚



講評

画数の差による文字の大小の調和がよろしい。その結果として、余白がきれいに見える行書作品。運筆は、無理なく流れて自然体に見えるのが良い。中学生の行書作品として、大変に好感が持てる作品といえる。学年・名前の行書も、大きさ・字間ともに本文に調和させて、半紙全体に余裕・余韻を広げており、抜群である。

優秀賞

敦煌木簡

専修大学松戸中学校 三年 井上 裕紀子



講評

文字を大きめに配しながらも、線の太細を上手く使って明るさの出た行書作品。軽快な運筆のリズムが伝わってくる。名前の位置を事前に検討しておく、さらに良くなる。

五穀豊穰

島根大学教育学部附属中学校 三年 栗岡 佑以子



講評

紙面いっぱい文字を配して、全面的に押し出すような表現で、線質は濃墨による重厚でねばり強いタッチの行書作品。名前も上手く配字して、印象に強く残る作品である。

佳
作



中大兄皇子

青森明の星中学校 三年
大 野 柚 子



感動

合志市立西合志南中学校 三年
石 堂 愛 実



和漢交響

江戸川区立小岩第三中学校 一年
中 山 こころ

【入選】

「五穀」	市川中学校	三年	浅山優花	「理想の実現」	墨田区立墨田中学校	三年	原田舞優
「理想の実現」	光塩女子学院中等科	三年	雨宮沙雪	「理想の実現」	春日部共栄中学校	二年	藤井心
「理想の実現」	白井市立大山口中学校	三年	飯野鈴花	「理想の実現」	初芝富田林中学校	二年	村田樹優
「臨 黄庭堅 松風閣詩卷」	佼成学園女子中学高等学校	三年	池亀志和	「理想の実現」	日本女子大学附属豊明中学校	一年	本橋咲貴子
「式典」	江戸川区立小岩第四中学校	二年	石田征樹	「富士の雲海」	鳩山町立鳩山中学校	二年	柳澤祐理子
「挑戦」	江戸川区立小岩第一中学校	二年	伊藤えな	「理想の実現」	聖マリア女学院中学校	三年	山田彩心
「理想の実現」	新島学園中学校	三年	今井花香	「挑戦」	江戸川区立小岩第一中学校	一年	渡辺 苺
「世界の海」	釜石市立釜石中学校	三年	今野比叶里				
「臨 張猛龍碑」	狭山市立狭山台中学校	三年	岩崎 諒				
「空庭惟鳥臨」	新島学園中学校	三年	江袋 綾				
「駿馬」	江戸川区立小岩第一中学校	三年	奥居優里				
「五穀」	市川中学校	三年	兼松彩月				
「感動の人生」	青森市立浪岡中学校	三年	鎌田愛莉				
「海辺」	葛飾区立葛美中学校	一年	神田咲江				
「理想の実現」	船橋市立御滝中学校	三年	北村 萌				
「海辺」	葛飾区立水元中学校	一年	小池希乃花				
「五穀豊穰」	利根町立利根中学校	三年	坂口龍翼				
「応援」	さいたま市立大久保中学校	一年	佐藤柚那				
「奇跡」	さいたま市立上大久保中学校	二年	佐野陽香				
「活躍」	千代田区立九段中等教育学校	三年	志賀陽菜				
「五穀豊穰」	さいたま市立美園中学校	三年	柴田 悠				
「秋の芸術祭」	弘前大学教育学部附属中学校	二年	須藤大翔				
「五穀」	市川中学校	三年	高峰 心				

書道部門

生徒

（小学生）

の部

最優秀賞

書道

青森市立浪岡北小学校 五年 佐藤 仁理



講評

書写の基本となる点画の始筆や終筆の筆使いがしっかりと備わり、その上で、「書」の横画間を等しくし、一画強調を踏まえた上下の組み立て方は見事です。「道」はシンニョウの書き方や組み立て方などのポイントを押さえて整った字形で書かれています。また、名前も、日頃の学習の積み重ねによつて字形・文字の大きさが適切に書かれ、作品の一部として調和が図られています。

優秀賞

土地

呉市立呉中央小学校 四年 伊東 琥子



講評

基本にそった筆使いでのびのびと運筆しています。特に、「地」の右上払いや曲がりの筆使いは完璧です。名前も字形が整って素晴らしい、練習の成果が見られます。

希望

葛飾区立細田小学校 五年 高橋 愛理



講評

迷いのない運筆で力強く字形も整って書かれています。まさに希望に満ちた作品と言えます。「望」の5画目が少し短いと、もっと安定した字形になったでしょう。

佳作



ゆ め

葛飾区立上小松小学校 二年
櫛 田 り み



世 界

さいたま市立大砂土小学校 六年
井 出 菜々香



伝統文化

黒石市立黒石小学校 六年
酒 井 陽 斗

【入選】

「雲海」	川口市立戸塚綾瀬小学校	五年	安部 穂杏	「希望の星」		呉市立阿賀小学校	六年	前田 かのこ
「必要」	江戸川区立西小岩小学校	五年	石川 翔一	「星くず」		大船渡市立猪川小学校	五年	松川 裳那
「世界」	さいたま市立和土小学校	四年	内野 詩絵里	「大地」		呉市立呉中央小学校	四年	宮脇 麻愛
「大空」	葛飾区立水元小学校	四年	大森 美桜	「出発の朝」		坂戸市立坂戸小学校	六年	矢島 綺星
「発信」	江戸川区立東小岩小学校	六年	岡崎 エリカ	「広大」		大田区立千鳥小学校	三年	横田 海斗
「広大」	川口市立戸塚北小学校	三年	笠井 珂那汰	「心に太陽」		北方町立北方小学校	六年	吉井 愛莉
「平和」	春日部市立武里西小学校	四年	神原 結愛	「土地」		江戸川区立北小岩小学校	三年	吉澤 里紗
「伝統文化」	島根大学教育学部附属小学校	六年	栗岡 佑万子					
「えほん」	東松山市立市の川小学校	二年	小泉 琉花					
「伝統文化」	練馬区立上石神井北小学校	六年	小林 夢果					
「太陽」	入間市立仏子小学校	四年	島崎 理央					
「虫」	いすみ市立長者小学校	四年	菅谷 知央					
「伝統文化」	清瀬市立清瀬小学校	六年	高木 綾音					
「挑戦」	江戸川区立上小岩第二小学校	五年	武田 莉知					
「書道」	川口市立木曽呂小学校	五年	種村 ゆきな					
「書道」	東久留米市立小山小学校	五年	田原 唯衣					
「ねこ」	船橋市立高根台第二小学校	二年	戸邊 奏太					
「大麦」	江戸川区立西小岩小学校	四年	外山 優斗					
「立秋」	葛飾区立鎌倉小学校	四年	中野 花音					
「伝統文化」	新発田市立東小学校	六年	野村 日向子					
「伝統文化」	朝霞市立朝霞第八小学校	六年	長谷川 菜央子					
「雲海」	坂戸市立坂戸小学校	六年	原田 結菜					
「夜空花火」	田舎館村立田舎館小学校	六年	平田 結愛					

書評部門

最優秀賞

仏像ぐるりのひとびと

二松學舎大学 三年

佐々木 彩乃



講評

審査員がほぼ一致で最優秀賞に選んだ。物語に登場する阿闍梨餅・カプチーノ・パフェ・熱いココアがほっこりと大日如来像を迎え入れ、仏像をめぐる暖かく柔らかな等身大の青春群像小説だということが伝わる。だれもが抱える心の痛みを、仏像を縁にして出会ったひとびとがいていねいに癒やし、ひとびとは一歩ずつ前に進む。仏像に会いたい気持ちになつて本書の世界に触れれば、自分と未来に向かい合う勇気がきつとじわじわと生まれる。

(麻宮ゆり子『仏像ぐるりのひとびと』光文社文庫)

優秀賞

かがみの孤城

本庄東高等学校 三年 新井七海

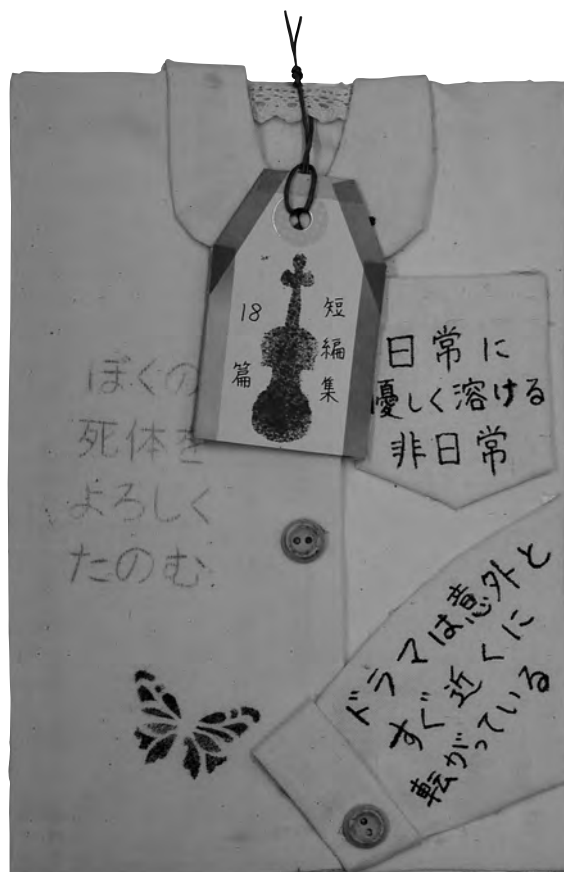


講評

POPとしてのまとまりがよく、造形も丁寧です。城の絵の細かに「小説への愛」を感じました。作品の内容を説明した文章もわかりやすく、「あつという間の554ページ」という締めフレーズも巧みです。

ぼくの死体をよろしくたのむ

二松學舎大学 二年 檜村優香



講評

折り畳まれたシャツが、書店のポップになった。そのことで、この本が持っている不思議さ、意外性、柔らかさ、温もりなどが、一瞬で見る者の心に流れ込む。ボタンやレース、蝶柄のスタンプを選ぶセンスには、人を立ち止まらせる力もある。

佳作

江ノ島西浦写真館

二松學舎大学 二年

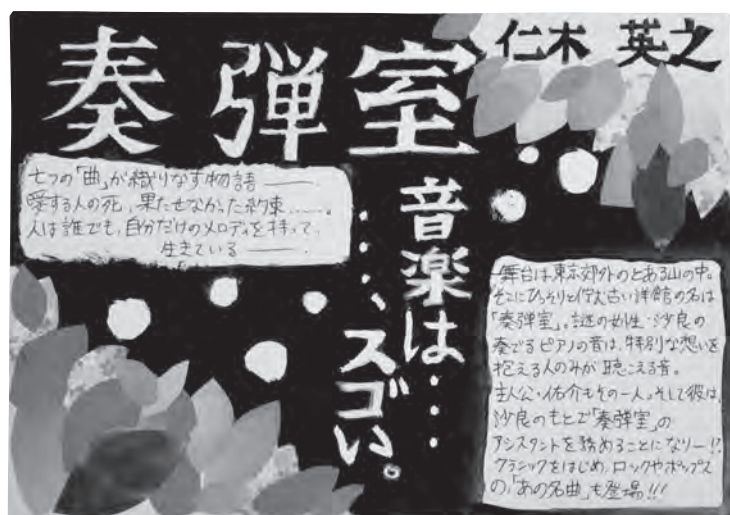
秋元 ののか



奏弾室

二松學舎大学 二年

市川 美咲



ある少女の姿見

二松學舎大学 三年

田上 真衣



【入 選】

「繕い屋 月のチーズとお菓子の家」 二松學舎大学

三年 小林 理 毅

学内感想文部門

最優秀賞

こころ

二松學舎大学附属高等学校 二年 川上舞花

不朽の名作と謳われる夏目漱石のこころ。この本は読もうと数年前に買ってはいたが、なかなか読む気になれずずっと本棚にしまってたが、この課題を機に読んでみた。

内容の濃さや表現の難しさに悪戦苦闘しながら読み進めること数日。最初に感じたのは恐怖だった。

先生は自らの叔父に騙され、両親の遺産を奪われ、心に大きな傷を負う。そして、自らも親友を裏切り恋人を得るが、親友が自殺したために罪悪感に苦しみ、自殺してしまう。

人は脆く弱いこころを持っている。それは誰でも平等に存在し、先生にもあり、Kにもある、もちろん私にもある。それは突然現れる。先生は親友とお嬢さんを前にした時にそんなこころが現れたのではないだろうか。そして、親友を裏切ってしまった。そんな自分を先生は一生許すことが出来なかった。

私が恐怖を感じた理由の一つに私は先生の状況になった時に同じことをする可能性があると思ったからだ。私は今まで生きてきて、誰かを裏切ってまで手に入れたと思うような人とは出会っていない。しかし、これから先そのような人が現れた時、私はどうするのだろうか。私は自分が人を裏切るような奴だとは心底思っていないが、先生と同じことをする可能性も否定しきれない。なぜなら、私も脆く弱いこころを持っているからだ。

先生は弱いこころと共に人一倍強いこころも持っていたのだろう。それを自らも分かっていたが故に恋を前にこころが揺らぎ親友を裏切った自分が人一倍許せなかった。だから先生は大き過ぎる罪悪感を一人で抱え、一生付き添う妻にKの死の真実を伝えられずに一人孤独に死んでいった。妻と共に訪れるKの墓参りはどれ程辛いものだったのか。私だったら想像もつかないし、耐えられない。

私は許すという行為は大切だと思う。もちろん世の中には決して許されないことだって存在する。だが、先生は許されるべきだったし、自らを許すべきだったと思う。先生がもし妻にKの死について語ったとしても妻は先生を許したと思う。しかし、それをしなかったのは先生の優しさがあったからだろう。

Kのことを話せば妻は自分の存在が先生を苦しめていたことに気付くだろう。そしてその事実が妻を苦しめることを先生は分かっていたのだろう。先生は妻への優しさのために自分のところを殺した。そして、遂にはその重みに耐え切れずに自分を殺してしまった。

私は先生の自分の信念を貫き生きる様は素敵だと思ったし、自分も見習うべきだと思った。ただ、最後の死に方は私は嫌いだ。何故なら結局先生は自らの妻を苦しめる枷になってしまったからだ。先生の思いを知らない妻は先生と同じように自分を責めるのではないだろうか。Kは先生を苦しめ先生は妻を苦しめる。だから、私は先生の死に方を良いとは思えない。だが、これまでの先生の辛さを考えれば仕方の無いことだとも思う。

私はこの作文を書き終え一番に感じたのは許すという行為の大切さだ。「自分に厳しく相手に優しく」先生とはまさにこの言葉通りの人だったのだろう。先生は自分に厳しすぎるが故に自分を許せなかった。私はそれが先生の唯一の明らかな失敗だと思う。だから、私は人を許し自分を許せる人になりたいと思う。

講 評

一文一文に雑味がなく簡潔で、滞ることなく最後まで読み切ることができました。課題小説に抱いた「恐怖」という感覚からはじまり、「先生」が持つ「脆く弱いところ」は自分の中にも存在することに気づき、「先生」は「妻」のことをどう考えていたのかという疑問を経て、最後は「許すという行為の大切さ」という発見へと至る。この展開が見事でした。また、書き手の人柄もにじんでおり、体温のこもった感想文だと思いました。

優秀賞

見えない心

二松學舎大学附属高等学校 一年 小泉 裕 奈

「こころ」とは、一体どういうものなのだろう。私は題名の意味している事が気になった。生物的に考えると「こころ」という臓器は存在しない。普段、私たちが「こころ」として感じているものは臓器としては脳の一部である。しかし、「こころ」はどこかと問われれば多くの人が自分の胸に手を当てるだろう。「こころ」は目に見えない。しかし、大切なものである。

主人公の私が先生の手紙を通じて先生の心を見つめ、先生の気持ちを知ることになる。先生は若い頃、下宿先で一人の女性に恋をした。また、自分の親友Kもその女性に恋をしていた。そして先生と親友Kの間に嫉妬心が生まれた。

嫉妬という言葉を書き調べてみると『人の愛情が他に向けられるのを憎むこと』と書いてあった。他の自分を比べ、自分が負けたという気持ちが強ければ強いほど、嫉妬心も大きくなるのではないだろうか。先生は親友Kにその女性を取られるのではないかと不安や焦りから、親友を裏切り、影で女性の母親に女性との結婚を申し込み承諾を得てしまう。女性と先生が結婚することを女性の母親から知らされたKと先生の間には気まづさだけが残ってしまった。先生は親友Kの気持ちを考えずに行動した。結果先生は「おれは策略で勝つても人間としては負けたのだ」という自責の念にかられた。しばらくして、親友Kは「自分は薄志弱行で到底先行の望みがないから自殺する」と書かれた一通の手紙を残して自殺した。

親友と好きな人、どちらか選ばなければならぬ時に選べるのだろうか。何でも言い合える親友は大切な存在だと思う。また、誰かを好きと思った気持ちも大切なものだと思う。本当であれば先生も、親友Kもこの悩みだけで済んでいたはずだ。しかし、嫉妬心という余計なものが混じったせいで取り返しのつかないことになってしまった。命が失われたことの重さが言葉では言い表せないほど心を辛く悲しいものにしてしまった。

私宛に届いた先生からの手紙には、先生の過去の経験と本心が書かれていた。さらに今現在の気持ちと先生の奥さん（親友Kも恋した女性）へのお願ひも書か

れていた。それは、先生と親友Kとの間にあった出来事を先生の奥さんが生きている以上秘密にしておいてほしいということだ。

人の「こころ」は自分の胸の奥の奥にあると思う。そして、それは誰にも見えない。自分の「こころ」を人に伝えるためには、言葉や行動で伝える努力をしなければならない。反対に、相手の「こころ」を知るためには、言葉や行動から相手の気持ちを考えなければならない。「こころ」には感情がまつている。笑い、喜び、怒り、不安、悲しみなどがたくさんあふれている。この感情は出そうと思っで出すのではなく、無意識のうちにつくられるものだ。ただし、この感情は隠そうと思えば「こころ」の奥に隠せる。SNSが普及している私達の時代は本音を隠しながらも会話ができてしまう。だからこそ現実で人と関わることが大切だと思う。時には、誰かを傷つけることも、自分が悲しくなることもあるかもしれない。それでも私は、しっかりと相手の目を見て「こころ」の奥にある気持ちをわかり合えるような親友と出会っていききたいと思う。

講評

感情の在り処とされながらも目に見えないものとして「こころ」を捉え、読み直した点を評価しました。また、「こころ」の非物質性から書き始め、見えなさゆえの問題で結ぶ構成の巧みさも際立っていました。

優秀賞

「こころ」を読んで

二松學舎大学附属高等学校 二年 堀井久智

私はこの本を読んで、「恋は罪悪」という言葉の重みを、改めて知ることができました。明るいイメージのある「恋」がなぜ罪なのか分からなかったからです。しかし、この本にある「恋」は全く明るい雰囲気はなく、私の知っている恋ではありませんでした。

「恋」は先生とKを狂わせる強い力を持ち、そして、先生に大きな罪悪感を残すという暗く重いものとして存在していました。

両親を早くに亡くし、財産を相続した先生は誰の目から見ても自由に結婚するには最適な相手です。そんな先生は、誰にでも優しく、自分の下宿にKを誘ったときもただ善意のもとだったと私は思います。先生は当事のことを、あまり良いように捉えていないようでしたが、私の目には親切な人だと映りました。

そんな先生に対して、Kは素直だとは言えません。自分の高い思想を持ち、他人に厳しく、自分にはもっとと厳しい。先生はそんなKに対して、自分にならないものを持つ憧れの対象として見ているような気がしました。

だからこそ二人と一人の女性の間に生まれた恋で悲劇が生まれてしまったのです。

Kは下宿に誘ってくれた先生に対しても、広く心を開くことはありませんでした。先生は、そのことを少なからず不満に思っていたと思います。Kが唯一、心を開いたのはお嬢さんだけです。微笑みを浮かべるのも、お嬢さんの話をするときだけ。素直さを見せたのも、先生から見たらその時だけだと思います。

深い友情を結んでいたわけではないでしょう。先生とKはいわゆる、普通の友達関係にあったと思います。そんな中に、「恋」という人間にとって重い感情が絡んでしまった。そして、先生はともて人の機微に聡い人でした。だから、何年も何年も毎月お墓参りをするのです。自分を客観的に見れる人だから、Kとの関係に苦しんだと思います。

それに比べて、Kは凄く鈍感な人なのだと思います。Kにとって、他人は他人以上の何ものでもありません。

「精神的に向上心のないのは馬鹿だ」

これはもとはKの言葉です。この言葉を読んだとき、私は彼がとても冷たい人間に思えて仕方ありませんでした。

もし、私がKの友人だったら、すぐに彼から、絶交を言いわたされるように思いました。

他人に厳しく、許容がない。だからこそ、「恋」という一つの感情に全てをかき乱してしまったのだと思います。先生は客観的にすべてを見渡すことが出来ていた。それは、きつと身内による裏切りという経験が、先生を大人にしたのだと思います。親から勘当を言い渡され、他人を拒絶してしまうKは、結局視野が狭い人間だったのではないかと感じてしまいます。

「恋」は誰か一人の存在を、自分のそばに置きたいと思います。かけがえのない誰かにとって、自分も同等の存在になりたいと願うことなのではないかと、この本を読んでいて感じました。

先生は自分の立場を分かっていた。そして、Kの気持ちも分かっていました。客観的に分析して、自分だけが幸せになる方法を導き出し、実行したのです。導き出された現実とは、先生の思い描いたものとは程遠かったと思います。先生は、きつとKに勝ちたかっただけなのだと思います。お嬢さんのことは本当に好きだったと思います。

しかし、本当にKと同等の恋を先生は抱いていたのか、私にはよくわからなくなりました。先生は、もしかしらお嬢さんではなくKに自分の存在を刻み付けたかったのかもしれませんが。誰かに、強く自分のことを認識してもらいたかったのかもしれませんが。

だから、最後に「私」に向かって、手紙という形で自分の記憶を託したのではないのでしょうか。

先生の手紙を受け取った「私」は、先生のすべての覚悟もまた受け取りました。図らずも、先生の考えを全て理解し、分かってくれるのは「私」だけだと先生は認識したのだと思います。

もし、私が先生の手紙を受け取ったら、と考えました。私は、手紙を読まなかったかもしれませんが。手紙を全て読み終えた私は、先生の青春を理解できると思えないからです。

いつか、「恋は罪悪」という言葉の重みを知る日が私にも訪れるかもしれませんが。その時、私はどんな風に自分を見るのか。視野を広げて、出会った誰かに向き合えたら、と強く思いました。

講評

登場人物たちに寄り添い、説明されていない心理の空白を埋めようとする姿勢に好ましさを覚えました。誰も悪人でなくとも、悲劇が起こりうる事情が明確にされています。他者に共感する力をさらに磨かれることを期待しています。

佳作

先生の手紙から読む『こころ』

二松學舎大学附属高等学校 二年 田 邊 華 野

夏目漱石といえば、どのような小説が有名でしょうか。『吾輩は猫である』、『坊ちゃん』そして今回感想を書いていく『こころ』など他にもたくさんあるでしょう。私は第一印象として、『こころ』は主人公と同じ目線で読むことができ、文も簡潔なため、純文学としてはかなり読みやすい作品だと思いました。今回はそんな漱石の最高傑作ともいえる作品の感想を述べていきたいと思います。

私が作中で一番衝撃を受けたのは、後半から始まる先生からの手紙です。この手紙により、前半での謎が解けていきます。先生からの手紙には「遺産問題による叔父からの裏切り」、重要な「友人Kの死」そして最後には「先生自身の死」について書かれていました。この作品はその先生からの手紙で終わっていて、その後の主人公の行動や心境については書かれていません。そこで私はもし自分が主人公の「私」であつたらどう思うか、考えてみることにしました。

まず手紙からわかる一つことは、先生は本当はとても人間らしい人間だということです。「私」や先生の「妻」は、先生の何をしてもし楽しくなさそうところや、世界を曲がった目で見ていることに疑問を抱いていましたが、手紙だと先生は素直に自分の後悔を打ち明けているので、そこに人間味というものを感じる事ができます。先生の態度からもそれが見られます。妻といふときの態度を例に挙げてみましょう。なぜ先生は、何を見ても楽しくなさそうにしていたのでしょうか。もちろん、それは単純にKが先生の頭から離れないからです。先生は妻と幸せになればなるほどKのことを思い出してしまうのです。きっと何度も何度もKが死んだときのことが蘇ってしまつて、いつも自責の念に苛まれていたのでしょう。私もその気持ちはよくわかります。実際に私もトラブルがあつたり、失敗してしまつて考え込んでしまつところがあるからです。トラブルや失敗の原因となつたものを見るだけでも落ちこむこともあります。さらに、それが作中では、友人の死であるわけですから、普通の精神状態では生きていけないはずです。ましてや自分のせいで死んだ友人の好きだった人と幸せに生きていくなんて到底できません。つまり、そんな過去を背負っている先生はいつも人間らしかったというこ

とです。

もう一つは、なぜ「私」に手紙を書いたのかということです。最初に読んだとき、私は先生と「私」は信頼できる友人のような関係であつたのではないかと思ひました。でなければ、普通そんな手紙を送ろうと思わないからです。しかし、理由はそれだけではないのではないかと思います。他に手紙を送つた理由、それは「もう一人の自分を生みだしたくない」という先生の気持ちがあつたはずで、先生は自分の叔父に裏切られ、そのときの気持ちを知らずに関わらずKを裏切つてしまいました。「恋」という感情につき動かされてしまい、相手の立ち場に立つて考えることができなかつたのでしよう。しかし「相手の立ち場で考える」というのは言うだけなら簡単でも、実践するというのはすごく難しいことです。身近な例をあげてみましょう。目の前で自分の友人が転んだとします。そのとき、友人には目立つた怪我はなかつたため、無責任に「大丈夫だよ」と言い自分がその場から去つたとします。さて、このとき自分はその友人の痛みがわかつていたでしょうか。そのときの友人の心がわかつていたのでしょうか。そして後日、転んだ友人が骨折したことがわかつたとします。すると、そのときにやつと「病院につれていけばよかった」「あのまま帰らなければよかった」と思うのです。それくらい「相手の立ち場で考える」ということは難しいと思います。きっと、先生はそれを「私」に伝えたいのだと思います。先生は後悔しても遅いけれど、「私」は間に合うからです。

それでも、先生は死んでしまいました。正確には「死んでゐるはず」です。妻を最後まで愛し、「私」に人生の教訓となるような手紙を送り、Kへの後悔は消えないまま、そのとき思い出された殉死という言葉に背中を押されて、そして死んだのでしよう。正直に言うと、そんな人間らしい人だつた先生を私は手紙を読んだから好きになりました。安心もしました。きっと「私」もそう思っているはずです。結局は、私たちは同じ人間です。いつ私に「私」になるのか、先生になるのかなんて、今は誰もわかりませんし、今これを読んでゐるあなたが登場人物の誰かになる可能性も否定できないのです。あるいは、既にあなたも私も登場人物のうちの誰かになっている、なんてこともあるかもしれません。

佳作

裏切り

二松學舎大学附属柏高等学校 二年 平子 結衣

この小説は私に衝撃を与えた。その衝撃は黒いもやとなって、読み終わった私の心に立ち込めた。読書前に「ころ」という題名から感じた、あの温かい響きはどこへ行ったのだろう。そう思いながら、黙々と読み進めていくうちに、読書後の私は裏切られたような心地がした。

「ころ」は夏目漱石によって書かれた小説であり、また代表作の一つである。内容は、鎌倉の海水浴で当時学生であった主人公が、とある男性と出会い、その男性を先生と慕うところから始まる。交流を深めても先生は自身の過去を話すことはなく、訊ねる主人公に時期が来たら話すと約束する。大学を卒業した主人公は、父が病に倒れたため実家にこもるが、ついに危篤状態に陥ってしまう。そんな中、主人公のもとに先生からの手紙が届く。手紙の内容は遺書同然のものであった。驚くほど長い遺書には、先生の生い立ちから妻との出会い、そして今に繋がる壮絶な過去について書いてあった。あまりにも暗い内容が続くため、読書中に気持ちが沈んでしまうことが何度あったが、読み進めると共に疑問に思う点や印象に残るところがあった。

まず読み終えてみて、読書前と読書後のこの小説に対する印象が大幅変わった。読書前は題名が平仮名であることから、柔らかな温かさを感じていた。三部のうちの上を読んでいく。先生の素っ気ない態度によって、先程までの感情は弱くなったが、どのような展開が繰り広げられるのか興味がわいた。中では、父の病によって東京に戻れない主人公は先生の手紙を待つ。「父は又突然引つ繰返った」。この一文から、全体の雰囲気が変わり始める。東京に行くはずだった主人公を引き止めたのがこの出来事だった。まるで、先生のもとへ続く道を阻んでいるようだった。そして下の「先生と遺書」。先生の壮絶な過去が語られていて、頭を殴られたように私は愕然とした。私が勝手に題名から感じた温かさというものが、衝撃や哀れという感情に変わったことで、題名と内容のギャップを感じた。

次に、主人公はなぜ先生と呼んでいたのか。先生がどのような人物かを聞かれた時、主人公は「何にもしていない」と答えた。何故そのような人を尊敬するのかと両親は不思議に思う。それは当然のことであり、何もしていない人を尊敬することに對して、誰もが疑問に思うはずだ。一般的に言うならば、大学の教授や著名人などの地位の高い人に憧れ、尊敬することが普通だろう。そしてその人に

近づくため、認められるために、人々は勉強に励むのだ。私もまたそのうちの一人だ。偉業を成し遂げ、世に名を知られる人物を私は尊敬し、先生と敬うだろう。主人公の「年長者に對しての口癖」という言葉で先生と呼ぶ理由に、口癖なら仕方ないと納得した。それ以外に理由があるならば、先生のミステリアスな雰囲気や世間に距離を置く態度に惹かれたからだとは私考える。

最終章で明らかになる先生の過去。先生は愛する女性を手に入れるために、親友を死に追いやってしまう。そして自殺した親友が先生の人生の中で一生消えない存在となり、好きな人と最高の人生を送ることができなくなる。先生は自分と似た行動に後悔してもしきれず、親友の墓に訪れては懺悔を続けていた。自分が犯した過ちを誰にも話せずにいた先生は、自分の人生に幕をおろすと共に、主人公に全てを明かしたのだった。何も知らされず、本当のことを教えてもらえない奥さんが一番気の毒だと思うが、何も明かしたくないという先生の気持ちも分からなくはない。

先生が自殺した根本的理由は、親友を自殺させてしまった自分を許せなかったからではないだろうか。その好機が来るのを待ち、明治天皇が崩御した時に決心したのだろう。私には自殺に至るまでの経験や体験をした事がないため、この部分の理解に苦しむが、二人の死は似ていると思った。親友は恋をしてしまった自分を許せないことが根本的理由で、先生の裏切りがきっかけで死んでしまった。つまり、人間が自分自身を許せない時に死を選ぶ。そして何かを引き金として生命を絶ってしまうのだ。先生は良い人だと思っていた親戚に裏切られ、人間はいつ悪人になるかわからないと言った。親友は自分に良くしてくれた先生に裏切られた。目的が金であろうと恋であろうと、人間が本当に悪人になってしまふことがよく分かった。私はいつか良い人に出会い、その人が何かを理由に悪人になって、私を裏切る。憎しみや悲しみを抱きながら、私は人生を送るだろう。そんな私もいつか、人を裏切って悪人になってしまうのだろうか。そう思うと、これからどうやって人間関係を築き、どう生きていこうかと深く考えさせられる。

佳作

この作品、少女漫画につき

二松學舎大学附属高等学校 二年 松 山 電

「いころ」を読むと姉に言ったとき、あの作品は怖い、と言われ、きつとおっかない人間の心の中を書いたものだと思像し、わたしは最初の一ページを開いた。読み進めていくと、わたしの想像していたものと違い、何というか、少女漫画のようだ、と思った。私と先生の出会いや、私が先生につきまとい、先生のことを知ろうとする様。わたしはこの作品が少女漫画にしか見えなくなり、ページをめくるたび、夏目漱石が真剣な気持ちで書いた文章一つ一つを、少女漫画にありがちな展開に、わたしは真剣に置きかえて読んだ。そんなわたしは一つの場合と一つの文章が忘れられない。

近頃泥棒が出るから、という理由で書斎の見張りを頼まれた私と、そんな私のためにお茶を持ってくる妻が議論を始める場面が忘れられない。妻は自信ありげに先生には嫌われないと言う、わたしは、なぜ妻がこんなに自信満々に自分が嫌われないと言えるのか、不思議に思った。妻は、自分が先生の中で人間として存在しているのではなく、妻として存在しているだけではないと思う、必要とされていると公言したから、でも先生からしたら妻は自分が生きるためのサポート役ではないかもしれない。『先生と遺書』で「私は妻に何も知らせたくない」と書いている。気遣いで自分の秘密を言わない夫から、必要とされていて、妻は悔しくないのか、と思った。

「私は今自分で自分の心臓を破って、その血をあなたの顔に浴びせかけようとしているのです。私の鼓動が停った時、あなたの胸に新しい命が宿る事ができるなら満足です。」という文章が忘れられない。初めて読んだ時素敵だ、と思った。まず、その血とは何か考えた、きっと先生の生きた証だと思う、具体的に言えば考え方や生き方なのかと考えた、そして『あたらしい命が宿る事』と何となく関係していると思った。先生の鼓動が止まった時に、その血が私の中に流れ始め、先生の生き方考え方が私の中で生き始め、自分が死んでも私の中で自分が生き続けてほしい、忘れないでほしいという願いなのでは、という結論に至った。

この一つの場合と一つの文章から、わたしの頭の中で、この三人のドロドロな

三角関係が出来た。でも、わたしの先生は妻よりも私への愛の方が重たかったと重う。わたしがそう願っているからかもしれない、先生の妻への想い方は、パンがないからケーキを食べるように、周りの人間が嫌いだから自分に一番身近な人間に好きという気持ちを持っておいて、何かあったらすぐ嫌いになれるような想い方だと思った。しかし、先生の私への想い方は、好きとか愛してるとかそんな可愛いものじゃなくて、依存に近いものに見えた。先程の文章や、自分の秘密を私にしか明かさないう、また、先生は人間が嫌いなのに、私はそんなことを気にかけていないかのように先生にくっついていて、先生もこんな今まで会ったことのないような人間、好き嫌い考えられなかったのか、これは、先生が私に好き嫌いを越えた依存へと迎り着いたように思った。

無関係な人間からアタックされ、心地良いわけではなかったのに、気づいたらその人宛ての手紙を書いている、そんな少女漫画のような展開。この作品、少女漫画でしかない。

【入 選】

「夏目漱石『こころ』に対する感想」	二松學舎大学附属高等学校	一年	上田悟史
「こころ」	二松學舎大学附属高等学校	一年	川上真由
「『こころ』をみたとき」	二松學舎大学附属高等学校	一年	船山愛美
「『こころ』を読んで」	二松學舎大学附属柏高等学校	二年	三橋美音
「心」	二松學舎大学附属柏高等学校	二年	渡邊幸美

平成 30 年度 二松學舎大学主催
全国学生・生徒文芸コンクール
入賞作品集

平成 30 年 11 月 23 日

二松學舎大学 文芸コンクール係

東京都千代田区三番町 6—16

電 話 03—3261—1285



二松學舍大學

<http://www.nishogakusha-u.ac.jp/>